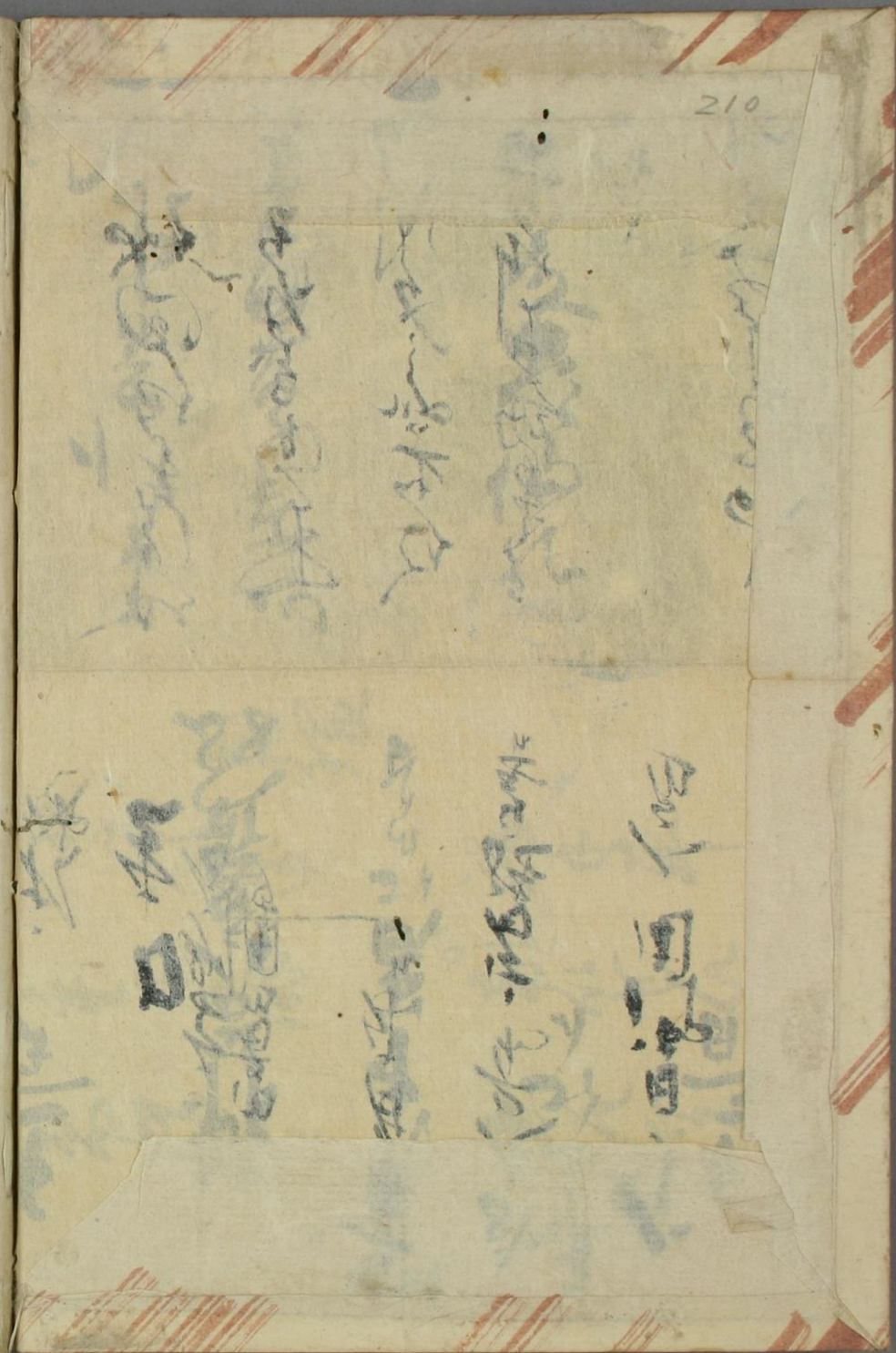
長唄囃子歌舞

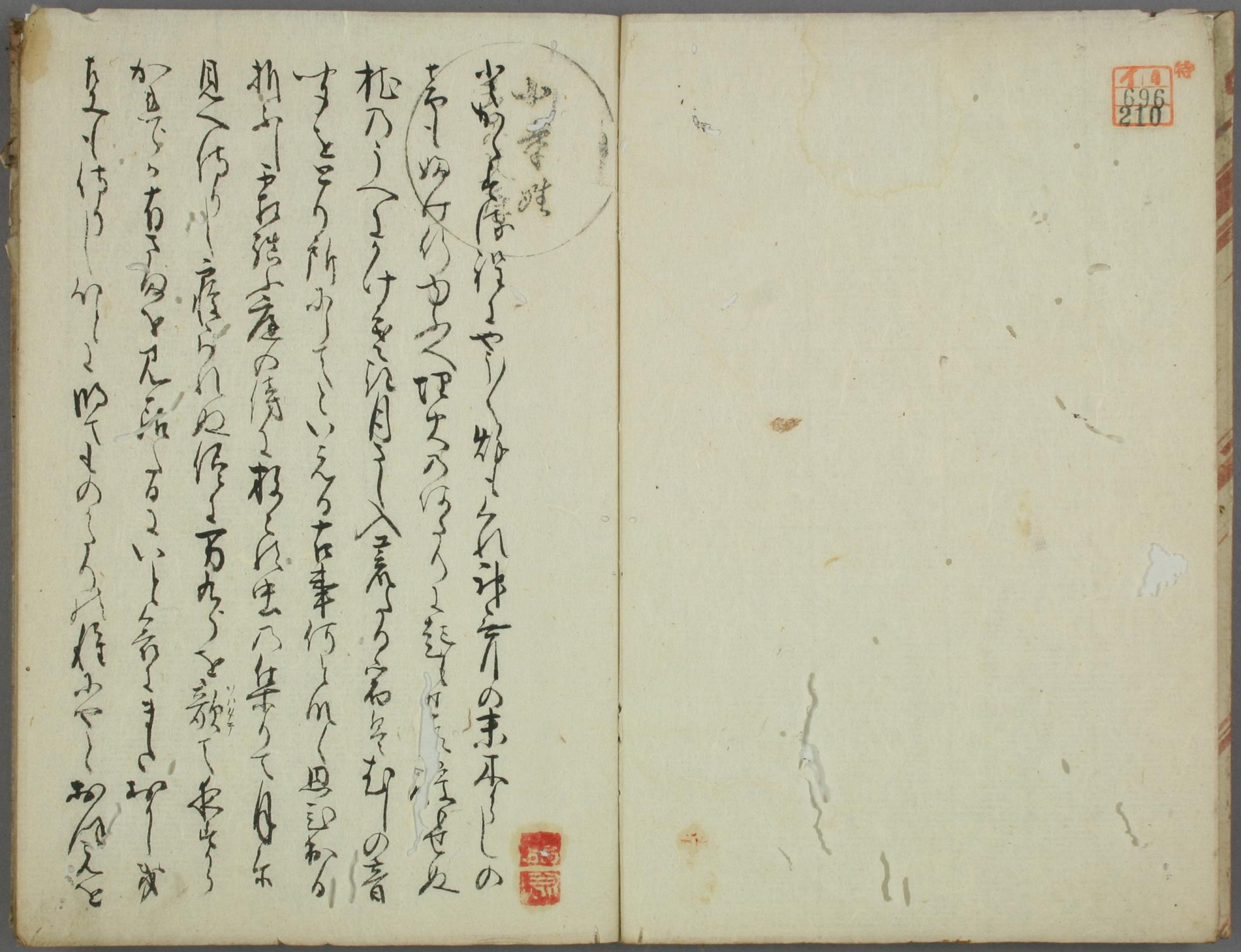
特別
イ4
696
210

長嘯集

全



696
210



こゝに書はせ侍る庭のかたはらなる萩一もとあり
残りなくかけそむ蛬のいつ迄のうけがたく枝の虫
も聞ゆりける八千種にしきがたは枝の秋の花ぞ
詠めたり給しはさもしく妙なる侍ぬ風も心得ぬ
此ほど紀いたく書をも落すけ侍れ共此世より海
なりなんずれば中々なる外に降るかの振舞
とぞ聞ゆ又は龍なんやうきもの外の月の末
八月のなかの名残月のさやかなれる
ましく風吹きそ初まし侍さま見て如侍りぬ

を其さくおもへかた月はいとゞ高くも見なき
中し来て帰りても見ゆるにて御身に成
こゝろなきものとゝなる萩原のみまされ
そとし夜の雨の野辺を侍れんなりけり
物をみて其ひとつの如くなり我は人に近き候
の根はひ遠くの跡はなれを侍るにて
やまに嵐の遥はるに松家如くに木の葉かげ残り
なさし如あさとひて人のいきかねる
はる月陰は冬の月のさやかにしつるひとり

こと妹しもれいふ御こんの庭と須らはりし
はすこしきんさんけしてこもいみへ玉生の君を
こそと仰り侍しより奉し今の帽をもこそて一こそ
はこ前後ちくし面といふもしかむむふしいえい
うかく書生のく源とはけく見えて何よりか申し
まこしたちさるもそこふいりみて今やしおかしらし
侍しけりく順みかいそうしけるきおもむくと
時すさてとをひりし侍りしてわたう侍られわひ也
ゆりくするれめかしられいさぬて見え侍るめ

前ときのひくかのしひの事くと称さはなり侍見え
と殿しあれ花染うしとの庭とはく孫粉くの生を
業し孫て以中く墓に伝きおしらいるか侍そ
面と一そそは後段会和そそら殿三十前を存す
ほとしもの思ひいとれたうちち称今ふして此中
らりん侍んまのと判者くてけしか侍るかをとさめ
殿十とし山て同壽も見と風流の過判者と成
まもをけて侍をかく侍るも忠きて判侍え侍れ
こちらへ古今の序とてわれ候はる蛙の声も世と

なし無是ゟ筆れぬ紙もなかりしかれハ是海とのへ
るゟ此判者ことはりけれハいふによふなく
黄金むかしとて花して障よられしやくし卜
おし俵て見るに手てそ清らさそ言と関へおほる有
さむ姉くさまてよハうち侍るを蛙しあるとかし
老けれはんえるれしはふあくものさまかり、

十五番虫合　　判者　池田義丞

左
中ごまきもしや竹の名に川のおり行きと君いなのむれ　　蜻蛉

右
御樹おちるそ河の御ゆくらくみつかれ君で追　　蜂

たかなきいけあらうきと君いなのめれみし一あるとに
たりしてんと嫌しれ作さ行りてこゝへ侍る
右のとりこん川めるみ君といふ加し御さかりく
けれしゆれんれとうらとやゆりん

左
つまなさとね毎ひ作りて男もそ志む雄の西にし君に一家中　　蛐

右
情なれ嵐らんいこ川の山然のまりとして引らゆし　　蟻

右のうち情なさと神くらひて引らゆしいふるて
せんとてあの風情を侍れとたの作りとはやかし
いふなかめくさるさあん侶との入まるゆへくて侍るに

たゞ何れも同じ程に侍れし

左
行くもの月に出しに立てつれ諸ともにくらさる　經織

右
悩らひ深き雨の帰らぬ気みの山にさてもの松　薫虫

左の歌まさしく聞えてしれつ祝は侍りし右の深の

両方共に判者の神さびぬ侍る

左
鏡の毛にかゝりて見えぬるかたの車　鶴郎

右
ためて君さまする○これは見渡しのやしほ心　延佳

左の作者もと添てなん君の車と哉て侍らん

まうらんと云は諸事文と見ハおて侍ごとく侍りか

むかし聲へてやいとゞあらんとかりそ大願より

こゝのほどこれのみなあつしれ侍れはたゞ上りにゝ宮

りしもしも此大かゝり侍るにし侍りし

左
よりの君さ野かたむきの山の姉の見てつれなかりける　芋虫

右
面影を惜み花を送る春のむらさきのかきなき　蝶

左の方作さの此あかれ引きれや侍る事なし

ふりし侍るもの句のまさりてかりけり

哉こや大かた風情に勝ちてもかうにとやて　持

勿論無文にこそ侍るめれしれども

なれに山かれ行を　本体はなとしいふ事を
しらくて鯨しいふ新てこそ行しめすらく
おもれてしれ行

左
いまも思ひのひとやかなるさつゆるく君を思ひ　毛虫

右
なきて夜もならをまさりて　いなめ恋しき気いを　蚰蜒

右の歌のうれつきまなき行ここを
おかしくて行れ右の歌さしつゆるもし　いふ
そらけにはなるかりいふれと御さしつ
行くや細これをなんはさ行をかきろ
あのうつ名を行て給へ思ひ業さらん
きれぬやしてもいて　めかれいれ佗れ行を
あらりのつけるさゝやすのむひとそ山本
られ行りすなまし

右
ふ恋ひは宿のさらてきろくてもつ君居けいと守　蚤

左
此そつらの手かゝ行ひて君か常まと待と　蜘蛛

右の歌を思ひしかれ作者れ庭のへ
しれおかの歌楽する而弘とみてもいる
ふらきん猶行するや歌まよしんまく行る

左
なを思ひ結ひひとなきの柳の花さきき思ひのむかし　蚊

右　綰しくをなうくやとん竹のよゝしとゆひまつち　松虫
たゝしとも我はるわさしのはなこゝゆれと
持とさし侍れ
左　四ひも也姫ぬる根にゐかけのねてなくきほ　蚓
太　年ハ高ちらひをそれ弱あれハ生ほ山て白淋しきいりし　木樵虫カ
左のはなゝあくれしし伸ちて其のねくとふる
ふとくゐとといふ侍の方の所こそ人氣流
の御願背れ侍るむちさして此ひてぬ海
し侍るな

左　秋のしさし侍しこの月高きのさぬきて又ハ月なりし　蜩
右　つゝるなとも春あれんはてこ春名とかて侍るむ章し　金虫
右の方をとこゆえうつれし世のなけとあす
ゝわさされそるかし　取しゝりの方こゝ大
つゝさして聞ゆてしれしてきえたと侍るやせん
左　茑谷の作ゝ詠るほる袂の名風のおこん付りなり　蛻
丹後ゝ地をもとめつれる根維や虫なきの寛き　蚊
たの作のみ風の付らぬといふも也て
高田風の作とあしるふ也ひ入るやくゝれと

点付は半ならハ必くとも在へきなれハ其をとし つかう
ふしいへる事はし 事や侍りし 其の趣き 定まれ
ることし 云ふさまよる 着こしくうちも 猶今
しんのん 思ひ出れ 有りまでしても 侍れは作
者ろこ 作の案を出すを大すに 待れかして 利者
ら勝らぬこし 行うえとを ひうけれ 書すうくきも
侍る事にて 成るとりれは かゝうる みけし 侍し かう
ゆるせ乃 判者 ふしくれの 三聖と 称せん半仙
画法 能れ 弥きすを 字ろしく 侍れハ 良こそ たう

練成し 侍るべく 三をと いうれハ 点かの ひろハ旅
むし ゆえ有ちかく いへし 侍らるへし
丸 かくゑ 見惟もし 見けしても 知今 ゆいも 見いかいけん　蛍
古 撥しと 後ちる つみてもとを 得て ここ よきて こゑの 男の 言葉　風
其の 斧を思ひ こわり 知しいえる 者の作 着ならに
ことも 思ひ 入さらん 作も ほうさんの 作者いさ
らね 俳言 かさね ものゝ まく 侍れハ いうまいらも
ちのえを 称せいふをとい るる 衆 れしほとく
こしく 侍るを よの者 比作 者の仕名ハ こそし

いやしき句をよみてもかしこまれしる古人落
殊勝に作りし御覧は定て先侍るを
花 清き月かな春の夜もうかむ月のほかの夜のかせん　螻
右 思ひ出の窓のあかりかうかもやみの光とかやとりあへん　螢
たれか作者なるかしられされまてせめて事をふと
おもへるの作はかへれるのてにはもしらめる
つらきかんしんのちからの作者なる詞をとりて
さらにされとも心文て名をもおかしく侍るよし
勝とかやかたさるへきにこそ侍るらめ

情とはいひかたし
左 思ふ事雲居も人やつけてもあまのいはれんとは何そや　蟷螂
右 情なくわすれはいなの川や世の中の身をやるらんけふ　蝉
左は歌道のおもしろさはなれるをもてなしに長明か
詞によりて和歌をよみしかはいつもうつくしきと申しき
左 思ひてまたきりの人やあかさきてみえはからはかなぬれ白玉の　蛇
右 つまもなきえんよかりかなをかなし　左かなし　蔓
左の歌字をぬらむくさしいからうき雲を
つらくてはこれはかなしとうへていふなり

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ゆくすえてけの為ものこすべし
四月廿三日侍也